

茨城) 抑留11年、何だったのか 93歳男性が自費出版

2016年8月20日03時00分



22歳から33歳までシベリア抑留の経験を本にまとめる三村節さん=水戸市渡里町



終戦後、旧ソ連の収容所などに11年間抑留された三村節（たかし）さん（93）＝水戸市渡里町＝が、極寒の地で重労働に就き、飢えと闘った日々を書き留め続けている。約60万人が連行され、約6万人が死亡したとされるシベリア抑留。「戦争の真実を伝えたい」と、抑留に関する3冊目の本を自費出版したところだ。

三村さんは1941年、旧満州（中国東北部）へ渡った。農業振興が目的の国策会社に就職、その3年後に関東軍に入隊した。敗戦後は将校らとともにソ連軍の捕虜になった。

貨車に乗せられ、約1200人の捕虜と山道を20キロほど歩いて夜中にたどり着いた先は何もない土地。「建物などあるか！これから造るんだ」と怒声が飛んだ。零下20度を下回るなか、慣れない道具で木を倒し、朝までに丸太小屋を完成させた。自分たちが囲われる外柵も建てた。

空腹に耐えながら、立ち木の伐採や貨物の積み下ろしにあたった。配給の黒パンやスープでは足りず、木の皮やキノコ、野草をゆで、カミキリムシの幼虫を焼いて食べた。凍った馬ふんがジャガイモに見え、拾い集めたこともある。何人かの捕虜は冬を越せなかった。予備士官学校の仲間は、作業後に横になったまま息絶えた。彼のポケットには凍った馬ふんが詰まっていた。「やがては俺もこうなるのか」。哀れみや悲しみの感情は失われていた。

最もつらかったのは「望郷の念」だった。知り合いの夢を見ては「会いたい」と願い、十五夜は「家族も同じ月を眺めている」と思いをはせた。3年目の夏。帰国列車に乗って喜んだのもつかの間、三村さんらを乗せた車両は切り離され、留め置かれた。帰国後の生活を話し合った活動が、スパイ行為だとして裁判で「懲役25年」の刑を受けた。北極圏の刑務所に送られ、「ここで死ぬほかない」と絶望感を抱いた。

炭鉱や学校建設などの現場で働き、日ソの国交が回復した56年にようやく帰国の途についてた。だが、今度は「ソ連帰り」「共産かぶれ」と差別を受けた。何十社と就職を断られた。

結婚して2男に恵まれたが生活するのに精いっぱいだった。定年後に人生を振り返る余裕ができ、「シベリア抑留とは何だったのかを考えたい」と筆をとった。今は4冊目の本を仕上げるため毎日、机に向かう。「戦争は色んな間違いを犯す。真っ先に戦地へ送られる若い人にこそ、戦争の真実を理解してほしい」

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.